宗像

第四十二回「若布献上の儀」
皇室へ若布を献上

当大社巫女より、全日空(株)客室乗務員に手渡された献上用『若布』

三月十七日(水)神島宮司、漁協関係者らが宮中へ参内し、天皇・皇后両陛下、皇太子・同妃両殿下、賢所、三笠宮家へ、早春の玄界灘産の若布を献上申し上げた。

若布は海洋神事奉賛会(宗像市・郡内の漁協で構成)会員が、寒風肌刺す玄界灘で二月後半から採集し奉納、それを神職・巫女が形を整え規定の量を袋に納め献上若布として奉製された。

今年は二月の寒波の影響により例年に比べると成育が遅れたものの、昨年より色合いも鮮やかで、作業をしていると磯の香りがする良質のものであった。

奉製作製の様子

献上前日の十六日(火)福岡空港から献上者が上京する際には、一般の乗客が見守る中、当大社巫女より若布を運んでいただく全日本空輸株式会社(全日空)客室乗務員への手渡し式が行われ、白布に包まれ杉箱に

宮中三殿

賢所
陛下の御祖先を「皇祖皇宗」と称するが、皇祖神(祖先神)をお祀りしています。

皇霊殿
皇宗である御歴代の天皇や皇族をお祀りしています。

神殿
八百萬神(全ての神々)をお祀りしています。

この三殿を『宮中三殿』と総称します。皇居吹上御苑の東南に位置し、日々陛下御自ら親祭され、掌典職が補佐しています。

4月祭事暦

春季大祭

○4月1日
午前11時　大祭
(氏子奉幣、主基地方風俗舞、浦安舞)

○4月2日
午前11時　総社祭
(献上若布採取者表彰)
午前11時40分
交通安全講社祭
高宮祭
第二宮・第三宮祭
宗像護国神社春祭
午後2時　献茶祭
(南坊流小方社中)

○4月15日　**月次祭**
午前10時　高宮祭
第二宮・第三宮祭
午前11時　総社祭

○4月23日
午前11時　**昭和祭**
引き続き
宗像大社奨学金受給生奉告祭

余滴

三八億年前、海に生命が誕生し、進化をつづけてきた。すでに滅びた種もあるが、今は一〇〇〇万種の生命が地球に存在する。人類も進化し今繁栄を謳歌している。世界人口は二〇五〇年には八九億人になると予測されており、地球環境は大きく変化するものと思われる。

古代より日本人は、生きてゆく上で犯してしまう罪・穢れの消滅を八百万神に託し、常に心身の清浄を願ってきた。平安初期に制定された『延喜式』大祓詞の祝詞文によると罪・穢れは最後に「瀬織津比神が大海原に持ち出て、次に大海原に坐す速開都比神がこれをすべての呑み、次に気吹戸主神に伝へ、次に気吹戸主神が根の国、底の国に気吹き放ち、次に根の国、底の国に坐す速佐須良比神がこれを全て解除給う」とあり、八百万神の連携により最後に大海原の神により祓い清められる。

現在も、毎年六月・十二月の晦日には大祓神事が全国の神社で行われ、祖先から伝わる自然との共存の生き方が今に伝えられている。

人間は、繁栄とともに自然の摂理に背きながら増加してきた。その中には、肉骨粉の配合飼料による狂牛病等の文明病発生という新たな罪をつくりだした。

今、画家ゴーギャンの晩年の大作にある「われわれはどこから来たのか。われわれは何か。われわれはどこに行くのか。」という人間存在の根源的な問いかけを思い出す。(H・W)

神具・装束　結婚式場調度品
井筒
福岡店 〒812-0045福岡市博多区東公園2-31
電話 福岡(092)651-9456番
本店 〒600-8231京都市下京区油小路六条北入
電話 (075)341-3341(代)～4番
(075)343-3341番

木組の家　匠の技
総合建築業　株式会社 弘江組
〒811-3406福岡県宗像市稲元1025　電話(0940)32-2567

納められた若布が、機内(全日空二五二便)へ運ばれた。

同便で上京する乗客全員には搭乗時、記念品として『宗像大社オリジナルレターセット』が手渡され、空港での全ての行事が終了、一行は空路東京へと向かった。

翌日の十七日は、春うららかな天候に恵まれ、皇居の桜のつぼみもふくらみつつあった。午前十時、神島宮司、随行神職、船越勇治氏(宗像漁協参事)、広橋守氏(鐘崎漁協参事)と出光興産社員の五人が、坂下門から宮中へ参内。

掌典職山田蓉氏に神島宮司が若布献上で参内の旨を言上、同掌典を通じて天皇・皇后両陛下に献上申し上げた。

続いて、宮内庁侍従職大滝宏二氏へ挨拶に伺い、神島宮司が記帳の後、宮中三殿参拝の栄に俗し宮中での献上の儀を滞りなく終えた。

宮中を辞した一行は東宮へ向かい、東宮侍従須賀正広氏を通じて皇太子・同妃両殿下へ献上申し上げ、更に三笠宮付宮務官板倉孝治氏を通じて三笠宮家へも献上申し上げた。

ここに宗像大社並びに海洋神事奉賛会の春の重儀「若布献上の儀」は無事終了した。

この儀が終ると神郡宗像にも春が足早に近付いてくる。

本年の若布献上者は左記の通り。

宗像大社
宮司　神島　定
権禰宜　御床　直之
宗像漁業協同組合
参事　船越　勇治
鐘崎漁業協同組合
参事　広橋　守

尚、本年の若布献上の際し、格別の御支援を賜りました出光興産(株)、全日本空輸(株)をはじめ、多数の方々に紙面をもちまして厚く御礼申し上げます。

機内へ運ばれる献上用の『若布』

若布献上の儀について

昭和三十八年、宗像七浦と称される宗像郡内七漁業協同組合(大島・鐘崎・神湊・勝浦・地ノ島・津屋崎・福間)の組合員で組織された「宗像大社海洋神事奉賛会」(現会長＝村田繁美宗像市郡漁協連合会々長)設立の際に始められた。当時は新幹線も未だ開通しておらず、夜行列車で上京したようである。

今回で四十二回目を迎えたが、この『若布献上』は、秋の『みあれ祭―海上神幸』と並ぶ同会の一大行事である。

若布はかつて宗像七浦で採取されていたようであるが、現在は地ノ島の沖合いで採取され、同島特産の「椿油」を塗った板に若布を張り付け、天日で干す「板干し」という古来からの加工法で調製されている。

加工された若布は例年三十キロ当大社に奉納され、神職・巫女が形を整え規定の量ずつ袋詰めする奉製作業が行われ、その中から厳選したもの六キロ(一、五キロ×四)を献上品としている。

宮内庁のご指示を仰ぎ献上日を決定。現在、賢所、天皇・皇后両陛下、皇太子・同妃両殿下をはじめ、昭和四十四年十月に宗像三宮を御巡拝、特に沖ノ島にも渡島され当時行われていた学術調査を御視察された三笠宮崇仁親王殿下の三笠宮家へも献上申し上げている。

乗客の皆様には記念品をお頒ち致しました

手渡し式での神事

宮中の職制について

宮内庁長官
陛下の行う公務や皇室関係の国家事務を扱う官庁である宮内庁を指揮される。

宮務官
長官の下で、庁内の総務を担当。

侍従
陛下の御公務を補佐。皇太子殿下を補佐される侍従を陛下の侍従(東宮侍従)と区別するため東宮侍従と称します。
(皇太子殿下の御住まいは東宮)

掌典
宮内庁の職制から独立して宮中祭祀を執り行い、陛下に直属するため内廷職員と称され、男子を掌典、女子を内掌典と呼ばれます。

献上用若布

孔大寺神社例大祭

三月二日、宗像市池田の孔大寺山中腹に鎮座される孔大寺神社で、年に一度の例大祭が斎行された。

この孔大寺神社が当大社の境外摂社である為、当日は当大社から神職一名が「奉幣使」として出向、午前九時過ぎ斎主の永島禰宜(本務社＝津屋崎町鎮座・年毛神社)、地元氏子関係者らと共に、麓の登山道より千五百段の石段を登拝。四〇分程で孔大寺神社に到着した。

この祭典は近年ブームの「ウォーキング」「山歩き」の影響により、年々参列者が増え続け、神社の廻りには既に多くの一般参列者がおり、中には峰の続く宗像市赤間の城山から縦走、或いは孔大寺山の反対側(裏)の岡垣町方面から登ってきた方もいた。

午前十一時から祭典が始まり、今年一年の神徳発揚と御守護を祈念した。

祭典後、参列者に地元池田地区の婦人部等により準備された、御神酒・カシワのおにぎり・ガメ煮・酢の物が登拝者全員に振舞われた。

絶え間なく続いた登拝者も午後二時には途切れ一同下山、麓の梛野地区公民館で直会行われ散会となった。

余談ではあるが、当大社御本殿周りには二十二の末社が鎮座し(連載中の『神郡宗像末社めぐり』の通り)、ここには現在の宗像市・郡内をはじめ若宮、遠賀にまで及ぶ、かつての神郡宗像の領域に祀られている七五末社一〇八神が奉祀されている。

毎朝神職が、本殿の日供祭に引き続いて末社祭として一日一社ずつ日供祭を行っているが、祭典翌日の三月三日早朝の末社祭は孔大寺神社祭であった。

境内にある大銀杏、胸高周囲は6メートル

孔大寺神社

当大社の境外摂社。明治の官国幣社摂社帳では、当大社八十四の摂社が廃止される中織幡神社(宗像市鐘崎)、王子神社(宗像市王丸)、的原神社(福間町八並)、宮地嶽神社(津屋崎町宮司)と共に、この孔大寺神社も当大社の境外摂社として残された。

宗像と遠賀の境に位置する四塚連山の最高峰「孔大寺山」の中腹に鎮座されている。境内には、県指定天然記念物で樹齢三〇〇年以上という、幹周り九メートルの「大銀杏」がある。

御祭神は「大巳貴命」「少名彦命」で池田地区の産土社。

中世、子供に天然痘が流行した際、この孔大寺神社に詣でると治癒すると評判になり、以来病気平癒の神として崇敬が厚い。

孔大寺山麓の梛野地区氏子が総出で奉製され、三月二日の例大祭時だけに授与される、「ワラジ守」はめずらしいと評判で例年完売する。今年も朝から麓の授与所では、子供に孫にと授かる参拝者で行列が出来ていた。

人事異動(神職)

四月一日付で人事異動を左記の通り行いました。

宮司　神島　定　神宝館々長
権宮司　高向　正秀　社務本局長
　　文化財管理事務局長(兼)
禰宜　堤　宏　海洋分局長(中津宮)
〃　葦津　幹之　祭儀部長
　　宗像大社菊花会事務局長(兼)
〃　伊藤　佳和　主基地方風俗舞保存会事務局長(兼)
　　庶務部長
権禰宜　渡邉　秀丸　五月寮責任者(兼)
　　経理部長
〃　杉山　安彦　宮司兼務社管理主任(兼)
　　庶務部長代理
〃　宇都宮　勤　津加計志神社管理主任(兼)
　　宗像護国神社管理主任(兼)
〃　佐々木　大冶　(財)式内社顕彰会九州支部事務局主任(兼)
　　祭儀部　儀式課長
〃　中原　裕生　辻八幡宮管理主任(兼)
　　祭儀部　賽務課長
〃　坂本　敬　氏子会幹事長(兼)
　　宗像大社菊花会事務局長(兼)
〃　御床　直之　宗像大社氏子会幹事(兼)
　　経理部　用度課員
〃　大塚　宗延　宗像大社菊花会事務局員(兼)
　　庶務部　庶務課員
〃　飛来　孝佳　氏子会幹事(兼)
　　庶務部　広報課員
〃　長友　貞治　宗像大社歌会担当(兼)
　　氏子会幹事(兼)
〃　藤田　俊介　祭儀部　賽務課員
　　氏子会幹事(兼)
出仕　飯田　明宏　祭儀部　儀式課員
　　宗像大社菊花会事務局員(兼)

最後の大宮司 宗像氏貞公墓前祭

宗像大社最後の大宮司「宗像氏貞公」の命日にあたる三月四日、宗像市上八にある公の墓前で、墓前祭が執り行われた。

この氏貞公墓前祭は、平成五年十一月老朽化が進んでいた氏貞公の墓石を保護する為、宇堂並びに顕彰碑を建立したことを機に、当大社と承福寺が神式と仏式による隔年で奉仕する事が定められ始まり、今年は当大社の勤番にあたることから神式で執り行われた。

氏貞公墓前祭

当日は寒波が舞い戻り小雪が舞い、玄界灘からの寒風が肌を刺す中、午前十一時から斎主の葦津禰宜以下神職二名が奉仕し、神島宮司、氏貞公の菩提寺である承福寺（宗像市上八）の埜村住職、同じ臨済宗の隣船寺（同市神湊）の田代住職、代々宗像大宮司家に仕え上八の地に氏貞公を埋葬された占部一族の末裔の方々、地元上八今門区の皆様ら約二十人参列の下、しめやかに執り行われ、戦国乱世にこの神郡宗像を守り抜いた郷土の英雄の遺徳を偲んだ。

祭典後、今門公民館で直会が催され、一同和やかな時を過ごし、この墓前祭・法会を子々孫々まで受け継いでいくことを誓った。

宗像氏貞公

周防国黒川（現在の山口市）で生をうけた氏貞公は幼少時、宗像家に養子として迎えられた。

宗像家の家督争いに巻き込まれながらも、室町時代末期に第八十代大宮司となり、大宮司職（神職）と大名職（軍事・行政）を兼ねながら、神郡宗像を守り抜いた。当時は世情不安で戦乱の絶えない日々、近隣には毛利・大友・島津・竜造寺氏らが勢力拡大に凌ぎを削る中、公は知略と武勇により安泰を保った。

兵火で焼けた御本殿の再建（現＝国指定重要文化財）、神郡内の社寺建立・復興に力を注ぎ、郡民から厚い崇敬を受けたが、天正十三年（一五八六）四十二歳の若さでこの世を去った。

当時公は豊後大友勢と敵対し、攻防駆け引きの最中にあったため、その死は三年間秘密にされ、遺骸を竹籠に納め夜中密かに家臣の「占部右衛門」が、承福寺（宗像市上八）に運び、現在墓標の立つ地に埋葬したという。（ちなみ占部一族代々の奥津城は、同じ高台に公を守るように建っている。）

公に嫡子がなかった為、神代から続く宗像大宮司家は、豊臣秀吉の命によりここで断絶。以後、そのご神威を普く知られた宗像大社も次第に衰微していった。

宗像氏貞公画像（原画）

宗像氏貞公画像
（原画を元に再現）

※写真は承福寺提供。

神郡宗像 末社めぐり

三十六 許斐上六御前（六之神社）

宗像大社から東南に約十キロメートル、前号に紹介した許斐山麓に鎮座する六之神社が今回のお社である。

御祭神は伊弉册命・瓊々杵尊・豊玉姫命・田心姫命・湍津姫命・市杵島姫命の六柱をお祀りし、厚板葺の本殿は、レンガ数段積み基礎上に西南面して立つ、覆屋付き小型の一間社流造である。

正平年中行事の許斐権現の眷屬小神のうちに「上六御前 一所」、同御前神事の條や吉野期神事目録、慶安神事次第には祭事の記述が見える。

筑前国続風土記附録宗像郡下の王丸村の條には、「六之御前社 コノミ、神殿方一間、拝殿二間・三間、祭禮九月九日、奉祀中津内膳。十戸の産神也。」とあり、同拾遺 十八の王丸の條には、「六之御前社 枝郷許斐の産神也。所祭、伊弉冉命・瓊々杵尊・豊玉姫命・宗像三女大神也。～中略～近古御社衰し時より上七郎殿・上六御前を一所に併せ祭りしにや。別に上津七郎殿と云社、今はなし。年中の祭、王子社に同くて、是又許斐の從神也。今は別社の如なれとも、左には非す。社は許斐谷権現社を去事七町計、巽に向へり。」とあり、明細帳によると、宗像市王丸字許斐鎮座の六之神社（舊無格社）とするとある。

自然林に囲まれ落ち着いた雰囲気の境内だが、前号にも書いた通り、「宗像市民憩いの場」許斐山登山道周辺の、近年めざましい整備状況に比べ、おざなりになっていると感じられる御神域は、どこか淋しげに毎日登山・参拝者を見守り続けている。

出光興産（株）兵庫製油所で還座祭

二月二十四日午後五時から、出光興産（株）兵庫製油所内に鎮座される宗像神社で還座（かんざ）祭が斎行された。

出光興産三番目の製油所として、昭和四十五年十一月に操業を開始して以来、一日八～十四万バレルという精製能力で需要と供給のバランスをとりながら操業を続けてきたが、日本国内の石油製品需要の減退、アジア域内での精製能力増強もあり、設備過剰問題が顕在化し、かかる環境下での企業体質強化を図るため、平成十四年十二月十日兵庫製油所の閉鎖が決まった。

ついては、昭和四十六年十二月二十七日に四代前の久保宮司奉仕の下御還座（せんざ）されて以来、兵庫製油所を三十年以上に亘り見守り続けた「宗像神社」も還座されることとなり、当大社より神職二人が出向し、冬の澄み切った夕暮れの中、兵庫製油所長須田善一氏、同総務課長庄司憲二氏らおよそ三十人が参列し、厳粛裡に斎行された。

この宗像神社の社殿は、当大社の御本殿を細部まで模して造られたまさにミニチュア版宗像大社、すぐ脇には地主神、当大社御神木の「楢（なら）」の木まで植えられていた。

尚、一八〇名の従業員は昨年の二月から大半が出光の関係先へ異動、中には勇退、再就職されている方もいる。出光興産（株）兵庫製油所元従業員の皆様の、今後益々の御活躍を心より御祈念申し上げます。

大社の御神宝 9
～昭和の御造営①～

工事完了直後の辺津宮本殿

当大社神宝館は二月一日に常設展の展示替えを行った。今回は「昭和の御造営」と題した新しいコーナーを設け、その関係資料を展示している。

「昭和の御造営」とは、昭和四十二年四月に宗像大社復興期成会により立てられた大社の復興計画を下に実施された、大社史上、最大規模の造営事業である。辺津宮本殿、拝殿の修復工事はもとより、諸施設の新築、改築や駐車場の整備、さらに第二宮、第三宮の社殿復興などがなされた。

辺津宮本殿、拝殿については、宗像第一宮御宝殿置札（本殿の棟札で、ほか三枚と共に当館にて展示中）から室町時代末期の弘治三年（一五五七）に焼失したことがわかっている。現存する本殿は、焼失から二十一年後の天正六年（一五七八）に宗像大宮司氏貞により再建されたものであり、流造、柿葺の簡素雄大な趣きをもつ桃山時代初期の代表的建造物である。拝殿は天正十八年（一五九〇）に筑前領主小早川隆景の再建であり、切妻妻入造、柿葺で本殿と同様の印象をもつ。四百年後の現在も当時の姿をとどめており、重要文化財の指定を受けている。

辺津宮本殿の解体修理及び拝殿の修復工事は、昭和の大造営事業のなかでも中心をなすものであった。工事は、文化庁の指導監督の下、同庁推薦の修理技術者の手により昭和四十四年から四十六年までの二年間を費やして行われ、流造、柿葺の社殿に朱漆を施した創建当時の壮麗なたたずまいを再現した。その他の境内整備事業も、全国から寄せられた御浄財をもとに滞りなく進められた。

昭和四十六年十一月十一日、勅使の御参向を仰ぎ、本殿遷宮祭が斎行された。この記念として、当社の御親神をお祀りした伊勢の神宮から、昭和四年の式年遷宮の際に奉製され昭和二十九年に撤下された御神宝類を特別にお譲り頂いた。また、造営事業に多大な御貢献のあった出光佐三氏、出光弘氏、太田清蔵氏より刀剣と拵えが奉献された。撤下神宝の内容は次の通りである。

一、皇大神宮別宮伊佐奈弥宮御料
　　御鏡　一面
一、皇大神宮別宮滝原宮御料
　　銅黒造御太刀　一柄
一、皇大神宮別宮滝原竝宮御料
　　御楯　一枚
一、皇大神宮別宮伊雑宮御料
　　御鉾　一竿
一、皇大神宮別宮月夜見宮御料
　　御櫛箱　一合

さらに最終事業として昭和四十九年からは、往時に存した第二宮、第三宮の社殿を跡地に復興しようと、伊勢の皇大神宮別宮である伊佐奈岐宮、伊佐奈弥宮の古殿を賜り、それらを当大社第二宮、第三宮の社殿に充てた。宗像大神の御祖神を奉祀していた古殿舎に宗像三神のうち二神をお祀りすることとなったのである。その後、昭和五十年にこの造営工事を終えて遷座祭を斎行し、当大社の昭和の大造営はすべて完了した。

崇敬者の御協賛により、往古の神域をほぼ再現し得たこの御造営事業の意義は重大なものであり、遷宮祭斎行もまた大社史上画期的な盛事であったといえる。その盛事を今に物語る、神宮撤下神宝並びに奉納刀を次回よりご紹介していこう。

新人紹介

見習期間を終え、三月一日付で巫女になりました白土巫女を紹介致します。

①白土　景子
②昭和五十七年十二月十八日生まれ　二十一歳
③宗像市日の里
④福岡工業大学短期大学部OA情報システム部システム学科
⑤パソコン
⑥真心をもって参拝者に接したいと思います。
⑦昨年の十二月より、宗像大社に奉職しております白土です。責任感をもって精一杯頑張りますので、よろしくお願い申し上げます。

①氏名
②生年月日
③出身地
④最終学歴
⑤特技
⑥抱負
⑦皆様に一言

（続）海の寄物 183

いしい ただし

国道三号線の古賀市と粕屋郡新宮町の境に、いまはすっかり削平されてしまっているが、ここに標高二〇メートルの丘陵があり、その丘陵に四基の円墳があった。古墳群は永浦古墳群と呼ばれる。

その丘陵の一番高いところにあったのが、永浦古墳四号墳であった。盗掘を受けておらず、長さ二・五メートル、幅六〇センチの箱式石棺があった。石蓋を除くと、中央に被葬者の骨、棺内には数振りずつの鉄刀、鉄剣、束になった鉄鏃、鉄矛、短剣等の大量の武器、工具、装身具の金環、小壺一、足のところに三角板鋲留短甲、頸甲、肩甲、眉比付冑があった。

古賀市・永浦古墳 4号墳石棺内部

千数百年、棺内にあったとはいえ、保存は極めて良好だった。開棺した時の様子を担当者は今も、興奮気味に語るほどである。

古墳は五世紀中ごろといわれる。四世紀末から五世紀はじめには倭が韓半島に絶えず進出した頃で、広開土王碑にはそれが刻まれている。

大量の鉄製武器を副葬（所持）し、甲冑に身を固めた人物、そして五世紀代ということから、この被葬者には大変興味が湧いてくる。

現在古墳群一帯の丘陵は削平されてしまってないが、調査の時に幾度か墳頂にたってみた。ここから北に玄界灘・相島・更には小呂島が見える。その延長線上に韓半島が横たわる。被葬者がこの場所を好んで選んだとも推察される。

使われている箱式石棺の石材が玄武岩で、玄武岩でも角閃石を含んだものは、相島産のものと言われる。永浦古墳の墳頂から正面に相島が望め、島までは古賀花鶴川河口からは直線距離にして九キロメートルである。ただ手頃な石材を運んで石棺に利用したのは、近いとか便利というだけでなく、石材のある島や産出地の政治的・社会的な結びつきがないと、石を運び出すことができない。

相島の北側の長井浜には二五四基の四世紀後半から六世紀にかけての大積石塚古墳群（国史跡指定）が営まれている。それを営んだ集団も存在する。その集団が津屋崎の本土側、宗像海人族との関係も云々されているし、志賀島には安曇海人族もある。そう言う海人族集団との関係も無関係ではないと思う。使用された石棺にも色々な情報が隠されているといえよう。

永浦古墳の石棺の石材が相島の玄武岩ということを確認するため二月中頃、古賀市の文化財担当の甲斐孝司君と島に渡り、島の各所で玄武岩のサンプルを採集した。海岸に出るとおびただしい韓国や中国の漂着物を目にした。

採集したサンプルは西南学院大学名誉教授の唐木田芳文先生にみてもらいさらに福岡教育大学上野禎一先生から顕微鏡で詳しく分析してもらうことになっている。「ことはそう簡単にはいきませんよ」。

編集部からのお知らせ

年度始めです。社報「宗像」の購読料をお納めいただきますようお願い申し上げます。対象者は、一般の購読者（贈呈者、現役の氏子会・評議員他役員を除く）の皆様で、今月号に振り込み用紙を同封させていただいております。

尚、既に複数年お支払いいただいた方は、納入いただいた年数がくるまで振込み用紙はお入れ致しません。

『宗像』編集の為、皆様の御奉賛を賜りますよう重ねてお願い申し上げます。

購読料

年間送料共＝一、〇〇〇円

第五一二回 宗像大社歌会詠草

大野展男選　毎月25日〆切

日の里　神田　一敏

薄暗き列車の窓に身を寄せてウスリー見んとすロシアの少女

(評) ウスリーはバイカル湖を源とし中国とロシアの国境沿ひに日本海に注ぐ八九〇キロメートルの大河。時期も場所も一切不明だが、こころ引かれる一首である。

大井　木原　ふさ子

法衣の袖背にからげて若き僧蝋燭の明り継ぎてくれたり

(評) 甲斐甲斐しい若い僧の動きもその時の雰囲気も見えるようである。

池田　森　龍子

草群に埋れし雪の音するや小犬は耳をぴくり動かす

(評) 繊細な感覚がとらえた、ういういしい小犬の動き。早春譜とも呼ぶべき一首。

朝野　藤井　浩子

次にくる干支にも飾り得るのかと一刀彫りの羊を仕舞ふ

(評) 十二年先の巳のありざまをふと思う。加齢することへの翳のような感慨である。

日の里　石松　弘次

捻挫して引き摺り歩くこのごろは行き交ふ人らの脚に目がゆく

(評) 弱者の視点に立つとき今迄見えなかったものが見えてくる。それは大義をふりかざすのみの政治家には見えない真実である。

大島　越智　治子

白波が岸にはげしく寄せる日は鴫ら沖の岩場で声あぐ

(評) 時化のあとには穏やかな日の来ることを鴫は本能的に、人は経験的に知っている。だから詠うことが出来るのである。

東旭ケ丘　天野　玲子

歳のこと話題となりきしみじみと鏡の中のわが顔を見る

(評) 「なりき」の『き』は、過去を現わす。友人達と駄弁ったあとを確めている作者のこころと姿が見える。

○いつかわれあらざるのちに誰か来て風呂場の鏡覗きなどせむ　樹口　圭子

女性が自身を鏡に見る眼差しには多分にナルシスト的な面があるのだろう。

牟田尻　横山　雪子

今日の予定変へて草引きはじめたり香のたちそめし沈丁花のもと

福間　中村　勇

寒き朝炬燵にをれば柱時計畑に虫よとリズムよく打つ

大島　杉田　禮子

時化さりて浜が動けば何となく心やすけし島にしあれば

田野　森　つるの

春一番過ぎたる空は雲もなく鳶の二、三羽高く舞ひをる

津屋崎　佐々木　和彦

もぐらにて盛上がりたる土手の土罅割れてゐる上部は乾く

日の里　大和　美由紀

笑まひたる恵比須の神に憂き事を抱えしわれも笑みのこぼるる

田野　森　甲子

雪のごと吹き満つ庭の梅の間に亡き父母の顔の浮かびく

福間　池浦　千鶴子

秋を好くわれにてあれどいつしかに春待つ心強くなりたり

福間　香月　照子

早春に降る淡雪は紅梅のかたきつぼみにくだけては散る

光岡　河村　久光

ラジオにてなつかしのメロディ聞ききており晩夏の今宵あつき灯下に

鐘崎　安永　久子

日々のニュースはどれも暗きなり探してほしい明るき話題

選者詠

大寺の木の間に積もりし春の雪掬ひて含めば苔の匂ひす

風邪熱の吾が手にむかれて玲瓏の林檎いびつなかたちとなりつ

散髪し首筋寒く街をゆくまたぞろ風邪をぶり返すかも

宗像大社 歌会 俳句作品集(四八七)

光岡　井上　嘉治

梅の花帽子に差して風薫る

東郷　田中　憲象

地吹雪が地吹雪起す人工島

光岡　白土　凌一

梅の花春一番に目を覚す

日の里　花田　いつ枝

パン売れて立春大吉店開

東郷　宗風社俳句会　吉武　湧泉

かじかむ手合はぬ拍手に鈴を引く

三浦　美千代

ねはん西鐘の音遠く通りけり

田中　雨葉

平成も二夕桁梅咲き戦あり

吉田　杏子

海の音静かなる日よ年明くる

木原　房子

増えもせず絶へもせずして福寿草

編集後記

『春』です。我が国では入学、就職、新生活、異動といった新たな出発はこの月に行われています▼そして『桜』が咲き、新たな一歩に花を添え、年によっては忘れられない瞬間を演出します▼日本の各地で様々な人々が、様々なかたちの出発をされていると思います。大きな出発をされた方、今春の桜を忘れることの出来ない「あの時の桜」として、新たな一ページを刻んで下さい▼ちなみに我が国の国花は『菊』と『桜』で、私の一番好きな花も『桜』です。日本人には現代人も先人達も含めて、そういう方多いでしょうね。(M・O)

発行所　宗像大社社務所　宗像会

〒811-3505　福岡県宗像市田島
電　話　0940-62-1311(代)
発行人　伊藤佳和
編集人　大塚宗延
制　作　ジーエータップ
印　刷　ゼネラルアサヒ

定価1年送料共1,000円